

『登高』 杜甫

憂愁の詩人 悲憤・慷慨を詠う

李白と杜甫は盛唐を代表する二大詩人ということは今更改めて言うには及ばない。自由奔放を極めた天才肌の李白に対し、杜甫は辛酸刻苦をなめ尽くした漂泊の詩人という対照的な存在でもあった。李白は杜甫より十一歳の年長だったが、ふたりは年齢の差を超えて心を許し合っていたことが、後に於いて、お互いがその頃を思い出し書き残された詩によって窺える。李白は七〇一年、杜甫は七一二年の生まれで、共に玄宗皇帝に仕えた経歴がある。李白は



酒の匂いも構わず皇帝に直接顔を合わせて言葉を交わすことも出来る、いわば特別待遇の身分だったが、杜甫は皇帝に意見具申をする左拾遺という役目からでありながらも、実際には間接的にしか意見具申は出来ない立場だった。しかもこの仕事にかなりの誇りと生き甲斐を抱きつつも、遂にはこと志と違うことになってその場を去り、その先はただただ長い放浪と苦悩の人生を送ることになってしまった。

李白の家柄にはよくわかっていないところが多い。が、杜甫はその家系がはっきりしている。十三代前の先祖は杜預(晋の名将かつ春秋左氏伝の注釈者)が居て、祖父には初唐の代表的詩人杜審言としんげんをもつ。代々地方官を務める名家の血筋だった。しかし、彼の若い頃の様子は、一、二の事を自身の詩に窺うことが出来るだけで、あまり細かいことは伝わっていない。二十歳前後の頃から二十九歳まで南方の呉や越、さらには東方の齊、趙の地方を漫遊して過ごしたことが判っている程度である。

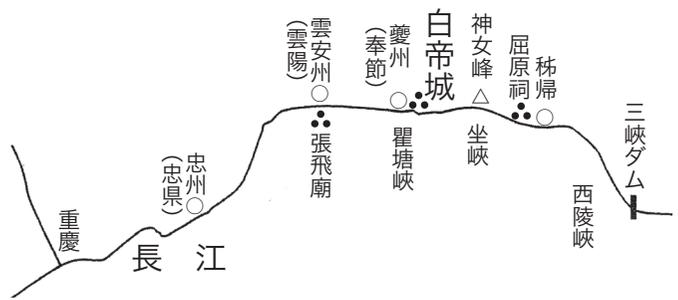
近体詩の確立

六朝時代に始まった声律の工夫が、初唐に入ってさらに

進み、平仄・押韻・対句の規定が整理されて五言律詩や七言律詩のような均整美を備えた詩型がほぼ完成するのが盛唐の時代だった。この詩型の初期では、主に使われたのはいわゆる宮廷詩で、典雅、艶麗の文辞をそろえ、故事をちりばめる繁雑な技巧に満ちた華麗な内容の詩がほとんどだった。そういう傾向はとかく単なる言葉の遊戯、文字の遊びに終始するという、詩としてはいささか本来の有り様に欠けているが、これは玄宗皇帝の宮中における華やかな生活を明けくれた影響といえよう。一方、陳腐な宮廷詩の域を脱却し、厳しい格律の中に、社会批判の深い志を凝縮させ、洗練された言葉によって人の心を打つような五言律詩・七言律詩の完成が、杜甫の出現によって初めて可能となった。

社会に翻弄された不遇の人生

詩人の多くは官吏登用の試験に合格した者が多かった。進士に及第し経国済民に力を致すことが究極の目標であるというのが中国人士の志すところだった。杜甫もまた進士の試験に向かったのだが、人間誰しも、生きる時代の偶然の係わりというものを避けることは出来ない。受験の時の宰相李林甫というまことに詰まらぬ人物のせいで、杜甫は合格することが出来なかった。李林甫を登用したのは玄宗皇帝だった。が、李は狷介けんかいこの上もない人物で、特に自分に欠けている高い教養を備えた人物を嫌い、自身の権勢を



拡大することだけに腐心するといふ小人物だった。十分な学識を備えた人物が合格に値する成績を収めても、彼等による自分への批判を恐れ、それを認めず全員を不合格にして皇帝には虚偽の結果報告で済ますような人物だった。杜甫もその被害者の一人だった。進士になれなかったのは必ずしも彼に力が無かったわけではない。

李ようこくちゅうや楊國忠、果ては安祿山のよ
うな人物たちによって世は騒乱の
時代に入る。さしもの唐朝も衰退
が始まり、かつての繁栄に影がさ
し始める。それやこれやで、不運

や不遇が重なり、三十歳頃から五十九歳で病死するまで、三十年におよぶ家族連れの放浪が続いた。生涯をとおして、成都の知人を探ねた時期の数年間が唯一安静を得たところであったが、ほとんど悲惨な流浪の後半生だった。養い兼



ねて遠地の親族に妻子を預けねばならなかったし、子が飢えて死んだ悲しみを詠んだ詩さえ残している。そんな生涯が終わる三年前に詠んだのが『登高』だった。

この詩は文字どおり「高みに登って」で陰曆の九月九日、重陽の節句に山や丘など高い所に登り、茱萸しゅゆ（かわはじかみ）を頭に挿して厄除けとし、菊の花びらを浮かべた酒を飲み、お互いの健康と長寿を祈る風習があった。重陽とは奇数の極致である「九」が月と日に重なるためにいう。「九」は「久」と音が通じるために特に縁起がよいとされていた。

| | |
|---------|--------------------------------|
| 風急天高猿嘯哀 | 風急に天高くして猿嘯哀し |
| 渚清沙白鳥飛迴 | 渚清く沙白くして鳥飛び廻る |
| 無邊落木蕭蕭下 | 無辺の落木蕭々として下り |
| 不盡長江滾滾來 | 不盡の長江滾々として来る |
| 萬里悲秋常作客 | 萬里悲秋 常に客と作り |
| 百年多病獨登臺 | 百年多病 獨り臺に登る |
| 艱難苦恨繁霜鬢 | 艱難 <small>はた</small> 苦だ恨む 繁霜の鬢 |
| 潦倒新停濁酒杯 | 潦倒新たに停む 濁酒の杯 |

風は激しく吹き荒れ、秋の空は高く澄み、猿の声が哀しく聞こえてくる。見下ろせば長江の水際は透きとおり、沙は白く鳥が輪を描いて飛んでいる。果てしない落ち葉は寂

しげに散ってゆき、尽きることを知らない長江の水は湧き立ちながらあとからあとから流れてくる。

故郷を去ること万里、私は秋を悲しみながら来る秋も来る秋もいつも旅人であり、生涯を通じて病がちの身であった今日九月九日には、ただひとりこの高台に上がっている。相次ぐ難儀のために髪が霜がめつきり増したことは、はなはだ恨めしく思う。私は近頃病気のため濁酒の杯を汲むことを止めてしまったが、いよいよ投げやりな気持ちにならざるを得ない。

この詩の表現上の特色

前半の四句で周囲の情景を描写し、後半の四句で自身の姿や心情を述べている。前半の四句では清涼で雄大な眺望をうたっているが、第一句には、激しく吹きおこる秋風と悲しげにひびきたる猿の鳴き声をとらえて、もの悲しい風情をただよわせ、第二句ではすがすがしい水辺の風景を描いて清澄な自然美をうたい、第三句では広大な空間を音たてて散り落ちる枯れ葉をとらえて、やるせない憂愁の気分を表現している。第四句では雄壮な力強い自然の姿をうたっている。つまり第一句と第三句の悲傷の情景は第二句と第四句の明るく鮮やかな風物と対照的に描かれることによって、その印象を一層強めており、その背景に作者自身の登場させることによってその孤独感と悲哀とが読む人の

胸に伝わってくる。後半においても、第五句と第六句の対応によって、よるべない放浪の孤独な作者が浮き彫りにされている。第七句に示される老後の杜甫の姿は、第八句の現実の告白を対応させることによって生々しい悲壯感をそなえている点など、探求すればするほど興味は尽きず、溜め息の出るほどの妙味のある構成は、中国漢詩史上、最大の作品として注目したい。

杜甫の終焉

数多い七言律詩中、古来希有の作とされている。或る評言には「前に人無く、後ろに来者無く、古今七言の第一なり」とある。四聯すべてが対句をなす全対格でまとめたこの詩は技巧を感じさせず自然で見事な完成度を示す。人間は本来孤独な存在であり、年をとるといふ絶体不変の法則に支配されるなか、この詩を目にするたび、その悲哀を感じずにはいられない。冷徹な事実と普遍的な真実を格調高く詠った名作は杜甫の代表作として現在に至るまで、多くの人に愛誦されたであろうが、その哀切さに思わず涙をこぼした人も少なくないだろう。

七六六年暮春、病状も小康を得たので、雲安から八十里下った夔州（奉節）に移住した杜甫は約二年間この地に住んでいるが、その間、西閣・赤甲・壤西・東屯と四回居を変えている。夔州滞在中、杜甫は約四百三十首の詩

を詠んでいるが、この詩はその中の一首である。大暦三年（七六八）の正月杜甫はこの夔州をあとに白帝城下を船出して三峡を下り江陵へと向かった。さ迷うようにたどり着いた洞庭湖においてその暮れに詠ったのが、かの有名な「登岳陽樓」の詩である。

五十九歳の長く苦難に満ちた人生は大暦五年（七七〇）の冬、岳州に向かう湘江の舟中においてその偉大な生涯を終えた。